

1982 年 1 月 6 日 一限目 「主体性と真理」

全般的な問題系についてのまとめ。主体性と真理

今年の目標：主体性と真理の関係を一般的な形で表すこと。

- ・ いかなる歴史形態において、西欧ではこれら二つの要素の諸関係が取り結ばれてきたのか。

新しい理論的出発点。自己への配慮 p4 117

全ギリシア文化を通じて長い生命を保ってきた概念：エピメレイア・ヘアウトゥー

：自分自身への配慮、自分自身の世話をする、自分自身を気にかける



デルフォイの神託「汝自身を知れ」ではない理由とは??  
西欧の思想史においては、<汝自身を知れ>こそが主体と真理の関係の問題を創設した定式であるということを示している。

デルフォイの神託「汝自身を知れ」のさまざまな解釈 p5 116



<https://worldheritage.online/?p=2832> より

神殿の入り口に刻まれた3つの格言のうちのひとつ

① 「汝自身を知れ」グノーティ・セアウトン

自分自身のなかで、尋ねなくてはならない事柄、尋ねたい事柄をよく吟味せよ。知る必要のある事柄に自分自身のなかで注意せよ

② 「中庸」

あまりに多くの事柄を尋ねることなかれ、有用なことだけ尋ねよ

③ 「保証」

神のお告げを聞きにくるときには、守れないようなことを約束するなかれ

➤ もともと、哲学的な意味での「汝自身を知れ」といった意味ではなかった。

- 道徳的な基礎としての自己認識でも、神々への関係の原理としての自己認識でもない。

配慮の人としてのソクラテス p7 13

- ・ <汝自身を知れ>はソクラテスという人物をめぐって現れてきている。
- ・ 「自己への配慮」に従属する形で表れる「汝自身を知れ」という規則
  - 『ソクラテスの弁明』（プラトン）（pp9-10）

本質的に他人を自分のことに専心させようとする者として自らを提示

- 自らのことに専心するよう他者を督励することは、「神の命令」（神々はアテナイ人たちを気遣う故にソクラテスを遣わしている）
- ソクラテスは、他人のことに専心できるようにと自らの富やいくつかの市政上の地位をないがしろにし、政治的なキャリアをあきらめ、役職や地位を求めることをしていない。  
：「自己に専心せよ」の問題において師の占めるべき地位
- ソクラテスの役割は、「同胞にたいして目を覚まさせる者の役割」=自己への配慮は、最初の覚醒の契機：人間の生存に打ち込まれてあるべき興奮の原理、運動の原理、生存にあって恒常

## 的な不安の原理

- ・ <自己への配慮>という考え方のほうが、<汝自身を知れ>よりも重要。
- ・ しかしながら、<汝自身を知れ>のほうが、特権的な仕方で結びつけられている。

## 古代の哲学的・道徳的生活の戒律としての自己への配慮 p12 14

- ・ <自己への配慮>は、ギリシア、ヘレニズム、ローマの時代をほぼ一貫して哲学的な態度を特徴づける根本的な原理
- ・ 一般に道徳的合理性に実際に従おうとするあらゆる活動的な生活における合理的なふるまいの原理となっていた
  - 総体的文化現象（自己へ配慮するべきであるという原則の督励、その一般的な受容）をヘレニズムとローマの社会に（少なくともそのエリート層に）固有のものとし、同時にそれを思考における出来事としたその歴史を、今年の講義で取り上げたい。
    - 文化現象は、実際の至高の歴史の中で決定的契機を構成し得たはず。
    - 近代的主体という存在様式もその影響を受けている

## キリスト教文献における自己への配慮 p13 115

- ・ 自己への配慮という考え方は、古代の哲学からキリスト教の始まりまで連綿と続いている
  - フィロン『観想的な生活について』、プロティノス『エネアデス』、オリュンポスのメトディオス、カイサレイアのバシレイオス、ニュッサのグレゴリオス『モーセの生涯』『雅歌講和』『浄福について』『処女性について』…
    - キリスト教的禁欲主義の一種の母胎にもなっている。

## 一般的な態度、自己に対する関係、実践の総体としての自己への配慮 p14 110

- ① 一般的な態度としての自己への配慮
  - ・ <自己への配慮>はひとつの態度であり、自己や他人、世界に対する態度である。
- ② 自己に対する関係としての自己への配慮
  - ・ <自己への配慮>は、自分が考えていること、思考の中で起きていることに注意を向ける一定のやり方を含意している。
    - 配慮 epimeleia ≡ 訓練及び省察 meletê
- ③ 実践の総体としての自己への配慮
  - ・ ただたんに一般的な態度、自己へと向けられた注意のかたちを指すのではない
  - ・ いくつかの行動、ひとが自己に対して行う行動、自己の世話をし、自己を変え、自己を浄化し、変形し、変容させる行動を指すもの
    - 一連の実践は、大部分が（西欧の文化や哲学、道徳、宗教において）長い運命をたどることになる  
訓練：省察の技術、過去を記憶するための技術、両親の吟味の技術、精神に対して現れるさまざまな表象の検証の技術
  - <自己への配慮>とは、ひとつのいわば哲学的定型表現：ひとつの生き方、ひとつの態度を定義している、さまざまな反省の形式や実践の一大資料体
  - 主体性の歴史、主体性の諸実践の歴史において、極度に重要な概念
    - 哲学的な訓練からキリスト教的な禁欲主義に至る千年にわたる変化、千年にわたる変遷を再検討する、重要な導きの糸の一つ

- ・ <自己への配慮>という考え方は、西欧の思考、哲学が自らの歴史を再構成する際にはないがしろにされてしまっている。(一方、で「汝自身を知れ」の特権化?)
- ⇒自己への配慮という原則の中には何か、私たちにとっていくぶん困惑を引き起こすようなものがある(自己中心主義や引きこもりを意味するものとなりがち)
- ・ 【ねじれ①】古代の思想では、極度に厳格な道徳の母胎となるような肯定的原則であった。
- ・ 【ねじれ②】「自己に専心せよ」という原則から出た非常に峻厳な道徳、それらの厳格な規則は再び採用されるようになる。
  - 規範の構造という点で同一のものだが、それが置かれる風土はまったく異なる
  - キリスト教と近代世界は、非・自己中心主義の一般的な道徳の文脈のなかに置きかえ、移転した。
- 自己への配慮の掟が忘れられ、古代の文化において占めていた地位が抹消されてしまった理由：真理と真理の歴史に由来→「デカルト的契機」
  - <汝自身を知れ>の哲学の中での格上げし、<自己への配慮>を格下げした。
  - デカルトの『省察』
    - ・ 「汝自身を知れ」は真理に到達する根本的な手段：論証の行程、哲学的な手続きの起源にある明証性≡コギト
    - ・ ソクラテスの<汝自身を知れ>≠デカルトの論証
  - 「哲学」を「主体が真理に至ることができるようにするものを問う思考の形式」「主体の真理への到達の条件と限界を定めようとする思考の形式」としたとき…
- 「霊性」：主体が真理に到達するために必要な変形を自身に加えるような探求、実践、経験
  - 認識ではない
  - 主体にとって、主体の存在そのものにとって、真理への道を開くために支払うべき代価
  - 探求、実践、経験の総体
- 主体の変形ないし立ち返りなしに真理はあり得ない
  - 主体をその身分、現在おかれている条件から引き離す運動：エロス（愛）の運動
  - 自己の自己への働きかけ、自己による自己の準備、自らの責任のもと、長い修練の辛苦のなかでなされる、自己による自己の段階的な変形：労働（=働きかけ）
- 主体に対する真理の「反作用」
  - 霊性にとって、真理はたんに、いわば認識行為に報い、それを完成するために主体に与えられるものではない。
  - 真理とは主体に天啓・至福・魂の平穏を与えるもの
- 認識行為（≡もともとの意味の「汝自身を知れ」？）は、主体としての存在における主体自身のある種の変形によって準備され、随伴され、裏打ちされ、完成されなくてはならない

- ・ グノーシス派：認識行為そのもののなかに霊的体験の形式と効果とをつねに置き換え、移転しようとするもの
- ・ 古典古代の時代において：「いかにして真理に到達するか」という哲学的問題と霊性の実践（真理への到達を可能にする、主体の存在そのものの不可欠な変形）の二つの主題は切り離されたことはなかった
  - <自己への配慮>とは、霊性の諸条件の総体。真理に到達するために必要な条件である、自己のさまざまな変形の総体。  
(例外としてのアリストテレス)

- ・ 真理の歴史の近代：主体が真理へと到達できるための諸条件＝認識のみ、と捉える：「デカルト的契機」
  - 自分の主体としての存在が修正されたり変質せしめられたりする必要もなく、彼自身で、ただ自分の認識行為によって真理を認め、それに到達できるようになった
    - ：真理に到達するために従わなくてはならない規則
      - ・ 形式的条件、客観的条件、方法の形式的規則、認識すべき対象の構造
      - ・ 外在的な条件「真理を認識するためには、狂ってはならない」
      - ・ 教養ないし陶冶にかかわる条件：学業を修め、訓練を受けている必要
      - ・ 道徳的な条件：努力しなくてはならないし、ひとを欺こうとしてはならない…
    - 具体的な生存における個人に関わるもので、主体そのものの構造にはかわりがない
- 「あるがままの主体は、いずれにせよ、真理を受け入れることができる」
  - ：主体性と真理のあいだの関係の歴史における、もうひとつの時代へ
  - 認識はひたすらに、進歩の際限のない次元へと開かれる。
  - それをもたらす利益はただ歴史を通じて、制度化された知識の蓄積によってのみはっきりしたかたちで与えられる
- 主体が自らについて認識した真理の「反作用」によって変容する瞬間（主体の存在を推移させ、横断し、変容させるあの瞬間）は存在しなくなる
  - 真理は、そのままでは主体を救うことはできなくなる。

霊性：

主体はそのままでは真理を受け入れることができないが、真理はそのままでは主体を変容させ救うことができる。

真実に到達することを可能にするものは認識であり、ただ認識だけであるということになった

主体と真理の関係の近代：

主体はそのままでは真理を受け入れることができるが、真理はそのままでは主体を救うことができない